

徳島県近海における水産資源の動向

徳島県漁業士会 事務局

門野 真弥

開催日時：令和7年2月5日（水）14：00～16：00

開催場所：徳島県庁

出席者数：15名

対象者：徳島県漁業士会会員、漁業者、県関係者

講演名：徳島県地先の魚種などを含めた瀬戸内海での資源動向や
環境変化への取組事例について

講師：国立研究開発法人 水産研究・教育機構

水産資源研究センター 浮魚資源部 浮魚第2グループ 河野 悌昌 氏

1. 緒言

徳島県は、播磨灘、紀伊水道、太平洋と性質の異なる三つの海に面している。このうち、播磨灘では、瀬戸内海機船船びき網漁業や小型機船底びき網漁業などの漁船漁業、また、ブリなどの魚類養殖業やワカメやノリなどの藻類養殖業が盛んである。近年、海洋環境の変化に伴い、漁船漁業では、魚種の変化や藻場の衰退による生産量の減少、養殖業では、ワカメやノリの生産不振等、厳しい課題に直面している。

徳島県漁業士会（以下、漁業士会）は、漁業士が環境保全活動や魚食普及活動、県内外の漁業士間の交流活動などを通して、会員の資質をより一層高め、漁業後継者の確保・育成に貢献する団体であり、漁場環境の変化に対応するため、令和5年度から会員の知識向上を目的に研修会を開催している。

この度、会員から「海の魚がなぜ減っている

のか」、「どうしたら魚が獲れる海に戻るのか」について考えたいと要望を受けたことから、国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究センター 浮魚資源部 浮魚第2グループ 河野 悌昌 氏にご講演いただいた。

2. 研修会の概要

研修会は、令和7年2月5日（水）に徳島県庁で開催した。

参加者は、漁業士会会員、漁業者、県関係者15名で、振り返り見直しが行えるよう動画として保存を行った。

河野氏には、徳島県の代表的な水産物を事例にした資源動向や近年の環境変化への取組事例について、興味深く、大変分かりやすい講演をしていただいた。

講演後は時間の許す限り、参加者との意見交換や質疑が行われた。

3. 講演の内容

「水産資源の変動—現在と今後—」

(河野 悌昌 氏)

まず、資源評価の手法や、資源評価により将来予測ができることを分かりやすく解説していただいた。

カタクチイワシや瀬戸内海中・西部におけるマダイ、ハモの資源量は安定しており、サワラやヒラメ、瀬戸内海東部におけるマダイは増加傾向である。

一方で、近年イカナゴは極端な不漁であることや、トラフグやタチウオは、瀬戸内海海域では低水準となっているが、東京湾や太平洋北部などで増加傾向にあるなど、魚種や海域により漁獲量や資源量の増減に違いがあることを紹介いただいた。

これらの一因として、黒潮の大蛇行や瀬戸内海での水温が長期的な上昇傾向であることなどがあげられた。

燧灘（ひうちなだ）におけるカタクチイワシのシラスの例では、経年的に不漁であり、親の主要な餌が春～初夏に減少し、親が痩せ、産まれる卵の質が悪くなり、ふ化した仔魚の生き残りが悪いといったサイクルが発生し、再生産に悪影響を及ぼしていることを紹介いただいた。しかしながら、多くの場合、資源変動の原因は複合的で複雑であり、特定することが難しいという指摘もなされた。

このほか、岩手県大船渡市の魚種転換支援策や宮城県のチダイを利用した新商品の開発、秋田県のキジハタの種苗放流の事例などを紹介いただき、漁業者や関係者が海洋環境の変化に対応した漁業を考えなければいけないとご助言をいただいた。

4. 質疑応答

講演終了後、参加者から活発な質問が行われた。(以下は、抜粋)

・栄養塩減少や高水温化により、カタクチイワシの餌のプランクトンが減少となっているが、燧灘が顕著なのか？

→昔から燧灘でプランクトン調査をしており、経年的な比較を行った結果、明らかとなった。他の海域でどうなっているかは不明だが、燧灘は瀬戸内海全体の中で特異的に悪い。

・サワラの増加は、資源管理の効果に加え、餌であるカタクチイワシの増加が原因なのか？

→サワラはカタクチイワシを好んで食べると文献があるが、資源の増減は複合的な要因によるものであり、餌の増加だけとは言えない。

・20年前船びき網でイカナゴが多く獲れていたが、近年は姿を見ない。今後増えていくのだろうか？

→砂に潜っている親魚や仔魚の量を調べているが、近年は数が少なく、厳しいと考えている。

5. 謝辞

○講師の河野 悌昌氏には、大変お忙しい中、貴重なお講演をいただき、厚く御礼申し上げます。



河野 悌昌氏の講義



会場の様子